

# 重力のない幻想世界

——英国ロイヤルバレエ

《ロミオとジュリエット》を観る

外国語学部フランス語学科教授 大岩昌子

名古屋で英国ロイヤルバレエを鑑賞する機会に恵まれるとは予想もしていなかった。世界教養学科の学生のためにバレエの事前講義を行ったご褒美に、学科のプログラムに便乗することになったのだ。ところが鑑賞後、その舞台について、本誌にエッセイを書くという条件が加えられた。それが多少憂鬱に感じられたが、それでも久しぶりのバレエ鑑賞に期待で心も躍る。



二〇一六年七月三日、会場の愛知県芸術劇場へと向かった。英国ロイヤルバレエが名古屋で公演するのは十七年ぶりだという。このバレエ団はロンドンの中心街、コヴェント・ガーデンにあるロイヤル・オペラハウスを本拠地とし、英国最大の規模と名声を誇る。ロシアからもたらされた古典バレエを導入する一方で、アシュトンやマクミランといった名だたる振付師によって、「ロイヤルスタイル」と呼ばれる気品ある様式が確立され、以後その伝統と魅力を育んできたことで知られる。配役を見ると、今回のジュリエット役はア

メリカ生まれのサラ・ラムだ。ポストン・バレエ学校で学び、二〇〇四年に英国ロイヤルバレエ団に入団後、わずか二年でプリンシパルに昇格。ロミオ役はオーストラリア生まれのステイヴン・マックレー。二〇〇四年に入団し、二〇〇九年からプリンシパルを務めている。

今回の演目は、シェークスピア原作の『ロミオとジュリエット』。悲恋の物語として知らない人はいないだろう。モンタギュー家の一人息子ロミオとキャピュレット家の一人娘ジュリエットが宿命的な出会いをし、永遠の愛を誓い合ったのもつかの間、両家が敵対関係にあるために破局を迎える話だ。たったの五日間で、出会い、結婚、死へと疾走する、十代半ばの男女の悲劇が描かれる。対立と憎悪という大人社会の縮図や、その狭間で翻弄される無垢な若者の一途な愛と死という普遍的なテーマは世界の人々の心をとらえ、時を超えて文学や映画など様々なジャンルで変奏されてきた。



会場が静まり返ると、大阪交響楽団による演奏が始まった。曲は、ロシアの作曲家、セルゲイ・プロコフィエフが手掛けたもの。踊り手、演奏家、観客、ホール、そしてそこに確かに漂う空気をも巻き込み、すべてが渾然一体となるあの「奇跡」が起きる瞬間が、再び訪れようとしている。と同時に、昔、バレエを習っていたときの記憶も甦り、胸が苦しいほどだ。

豪華に仕立てられた舞台に、柔らかなジョーゼットのチュニクをまとったジュリエットが、さながら妖精のごとくふわりと登場すると、観客席がかすかにざわめき、授業の一環として一緒に鑑賞していた、本学世界教養学科の新入生たちからもため息ともつかない声もれた。バレエの魅力は、なんといっても踊りそのものにある。踊り手たちが完璧な肢体を最大限につかって空中に描き出す美しい幻。生身の人間と知りつ

つも、この世の存在とは思えない。踊り手の動きから一瞬も目が離せない。目を離れた途端すべてが消えてしまいそうな感覚すら覚えた。

ところで、「トウシューズでたつ」ことは、傍目で見ると簡単ではない。バレエを習う少女の夢は、いつかトウシューズを履いて踊ること。トウシューズを履いて踊るには、重力に負けない身体の造りがなくてはならない。「重力を感じさせないこと」こそがクラシックダンスの神髄だからである。私がトウシューズを履けたのは、大人になってバレエを再開した時だった。優雅に、そして軽やかに舞う姿からは、水鳥が水面下で足を必死にばたつかせる姿を想像させてはならないのだ。

今回の演出は、日本でもたびたび上演されているマクミラン版で、一九六五年に、英国ロイヤルバレエによって初演されている。《ロミオとジュリエット》ほど、多くの演出が存在するバレエは見当たらないが、当然ながら演出によって、登場人物の描写は異なる。例えば、このマクミラン版以前のジュリエットは「情熱は秘めているがしとやかな深窓の令嬢」のイメージが一般的だったの対して、マクミラン版のジュリエットは、常に衝動に突き動かされる、心のどこかがいつもざわめいているようなヒロインである。感情むき出しの、おてんばなお嬢さんといってもいい。その点ではクラシックバレエの求める優雅さや気品からは些かはずれるようだ。だが、激しい恋に落ち、一気に死へと突き進むジュリエット像は、まさにこのマクミランの描くジュリエットと一致する。マクミラン版の醍醐味はなんといってもこの躍動感と疾走感にある。



バレエ《ロミオとジュリエット》は三幕からなる。第一幕は、物語の舞台となるヴェローナの朝の市場で、ロミオ、マキューシオらの若者が陽気に踊るシーンから始まる。そこに、ジュリエットの従兄であるティボルトが現れ、両家の争いが始まる。剣を使つてのリズミカルな対決シー

ンは演劇さながら。その後、場面はジュリエットの部屋へと移る。ここではジュリエットとその求婚者パリスとのパ・ド・ドウが見られる。今回の上演に際して、このパリス役が日本人でプリンシパルに昇格したばかりの平野亮一であったことも話題のひとつであった。彼が日本人離れした体格で、ゆったりとした踊りを見せる一方、サラ・ラムは、まだまだあどけない表情を見せるジュリエットを見事に演じていた。特にヴァイオリンと木管とがかけあう軽やかなプロコフィエフのテーマが、彼女の愛らしさを浮き彫りにする。ポワントで小刻みに走るように踊る姿からは若いエネルギーがほとばしる。場面はさらに変わり、キャピュレット家の門前。仮面舞踏会に紛れ込もうとした、ロミオと友人三人による快活な踊りと休む間もなく繰り出されるステップには華麗なテクニクが光っていた。やがて場面は、キャピュレット家の内部へと移る。全曲の中でも最も有名なこのシーンの曲は、両家の対立が招く悲劇を暗示するかのようにより重厚に響く。続くキャピュレット家の舞踏会のシーンでは、奏でられるフルートの美しい旋律がジュリエットの可憐さを際立たせていた。

第一幕の最後は、人も知るジュリエットの部屋のバルコニーのシーン。若い二人が、胸のときめきと悦びを全身に溢れさせながら踊る場面では、セリフのないバレエの勝利を感じた。前へ、前へと跳躍を繰り返すロミオの疾走感。人間として、また性的にも未熟なジュリエットが悦びにうち震える瞬間。高々とロミオにリフトされて肢体をそらせる高揚感と陶酔感。高度なテクニクに支えられた、この作品中、最大の見せ場である。空高く舞い上がるようなプロコフィエフの音楽とともに、ジュリエットが階段をバルコニーへと駆け上がっていく。音楽は静かに始まるが、やがてドラマティックに鳴り響き、天にも昇る二人の心理を見事に描写する。

第二幕は、街の市場でジュリエットの乳母が彼女から託された手紙をロミオに渡すシーンから始まる。そして、二人はロレンス神父のものと

で秘密裏に結婚式を挙げる。場面は街の市場にもどり、ティボルトとマキューシオが決闘する。マキューシオが死に、ロミオはわれを忘れ、思わずティボルトを殺してしまう。

第三幕はジュリエットの部屋の場面から。追放される運命のロミオと新妻ジュリエット。二人は離れたい思いを身体に刻むように抱き合いながら踊る。この別れのシーンのパ・ド・ドゥからは、死の予感に満ちた不吉さが感じられると同時に、死をも恐れず突き進む、若いジュリエットの強靱な意志が痛いほど伝わってくる。ロレンス神父から仮死状態を招く薬を受け取ったジュリエットは、朝冷たくなった状態で発見され、キャピュレット家の墓室に埋葬される。地下墓地で力の抜けたジュリエットの身体をロミオが揺り動かし、抱きかかえながら踊る。弦楽の悲しみに満ちた響きが広がり、管楽器に死のテーマが現れる。そして、ジュリエットの死を嘆くあまりロミオは命を絶ってしまう。するとジュリエットは息を吹き返すものの夫の死を知り、後を追って自害する。終演にふさわしいシーンだ。

幻想的なバレエによって私の現実的憂鬱はいつしか消え、目の前で繰り広げられた深遠な精神世界に、心が洗われる思いがしたのだった。



躍動感と疾走感を真骨頂とするマクミランのバレエは、「浮遊と落下、歓喜と喪失、生と死」といった、これ以上ない陰影に富む振幅を鮮やかに描き出す振り付けが魅力である。そして最後には「死体に踊らせる」という不条理をもやつてのける。初めはぬいぐるみ遊びをしていたようなジュリエットが、舞踏会にデビューして大人への階段を上り始めた矢先にロミオと出合い、恋に落ちる。まるで二人が愛し合うために生まれてきたかのように。家と家、国と国の争いは絶えない。だが、そのような敵対関係にあっても、人は愛し合う。そして、若者たちは恋によって成

長する。いや、この二人の激しき、性急さ、そして危うさは、やはり若者ならではのものだろう。



最後に音楽を担当したプロコフィエフについて触れておこう。ロシアの作曲家セルгей・プロコフィエフ（一八九一—一九五三）がこのバレエ音楽を生み出したのは、まさにロシアが粛清の時代に入るところだった。プロコフィエフは、同時代のストラヴィンスキーやショスタコーヴィチとともに、日本でもなじみ深い作曲家の一人である。ただ、ストラヴィンスキーほど革新的でもなく、ショスタコーヴィチほど悲劇的でもないプロコフィエフを一言で評価するのは難しい。彼は、ロシアを出て、大陸を横断、日本に立ち寄ったあと、アメリカに居を移す。ちなみにプロコフィエフは日本滞在中に、短編小説『彷徨える塔』を書いている。パリのエッフェル塔が歩き出し、街中をパニクに陥れるという荒唐無稽な物語だが、彼自身の居所のなさを示唆するようで、私は好きだ。

《ロミオとジュリエット》はプロコフィエフ自身にとつてきわめて重大な意義をもつ作品である。パリでの亡命生活の中で、従来の作風に飽き足らず芸術上の転換期に立ち、悩み続けたあげく、一九三三年、一五年ぶりでソヴィエトに帰り、モスクワに定住する。その直後、「ロミオとジュリエット」に描かれる詩的内容こそ、新しい試みをなしようという確信をもってそのバレエ化を思いついた。そして、振付師ラヴロフスキーと演出家ラドロフの協力を得て台本を作成、一九三五年の夏には全曲を完成させている。当然、モスクワのポリシヨイ劇場での上演を念頭に作業が進められた。しかし、ポリシヨイ劇場の踊り手たちは、チャイコフスキー、グラズノフと続いてきた近代ロシアのロマンティック・バレエに慣れ親しんできたため、プロコフィエフのシンコペーションを多用したりズムに「踊れない」と不満を漏らした。確かに、それまでのバレエ音楽と比

較すれば、音楽の細分化が気になり、踊るのに困難を感じるのもうなずける。また、当初結末が戯曲どおりの悲劇ではなく、ハッピーエンドに書き換えられた点も非難され、書き直すことになる。そんなわけで初演は延期、さらには上演自体がキャンセルとなる。こうした紆余曲折を経て、三年後にブルノ（当時のチェコスロヴァキア）でようやく初演の運びとなった。



バレエは、「文学」、「音楽」、「美術」、「舞踊」という芸術の融合体と言われる。ただし、バレエにはことばがない。だが、ことばがないという制約が存在するからこそ可能となる表現美がある。それは、軽々と国境を越え、民族を超える。セリフでは伝えきれない複雑さを身体は一瞬のうちに表現できる。さらに、『ロミオとジュリエット』は、敵対する家族、若さといった制約が加わることで、強度を増す。この作品が多くの上演回数を誇る理由はまさにそこにあるのではないか。制約の中でこそ多面的に成立する表現形式。今回このバレエを鑑賞して、そんな思いを新たにしてみたのだった。

（おおいわ しょうこ）

#### 参考文献

- 『バレエの見方』長野由紀、新書館、二〇一二年
- 『華麗なるバレエ三』ロミオとジュリエット プロコフィエフ 小学館、二〇〇九年
- 『プロコフィエフ』作曲家別名曲解説ライブラリー、音楽之友社、二〇一〇年
- 『プロコフィエフ短編集』プロコフィエフ、群像社、二〇〇九年